武蔵吉沢

彰敵静探小牧

初篇

中

A508
2

<48-8268>

竹田善次新形浮機小紋二編巻之中

在静岡　隣電居士梅里叟戯綴

第二回

いろのがり長のいとまのさるつけてきれみだるゝ嵯峨くらんとるどもあよそへて人くゞ密毎を辞めて離縁を拒めど迷愛頑固みまゞひよ商法かしらくたゝらきありて金銭多く貯へたれど人よ驕ぶり倍情よて自分勝手を極めていい五月でも引うぬ自恣自由只管なを死よ惑溺してい義理も法も歯牙滅裂よ甚い妻的い邪魔ッ怪ごとゝ子どもの世も打忘れて那でも離縁と迫るふゞ遣る方もなき悲しさの妻よい罪も過ちも泣の涙の血画ふさりの子どもが在らみくハ出て行れと云いれども我ら辞別しら毛めのも子よ惹うきる頃脳よ筆をのゞぎ業の且敷りく志の間の継掲ら炎なき家婢や子当りを更たゞめて必らず妥と云いせもし云も為ぬらんを心よ苦しとおもひ歩しぬらば

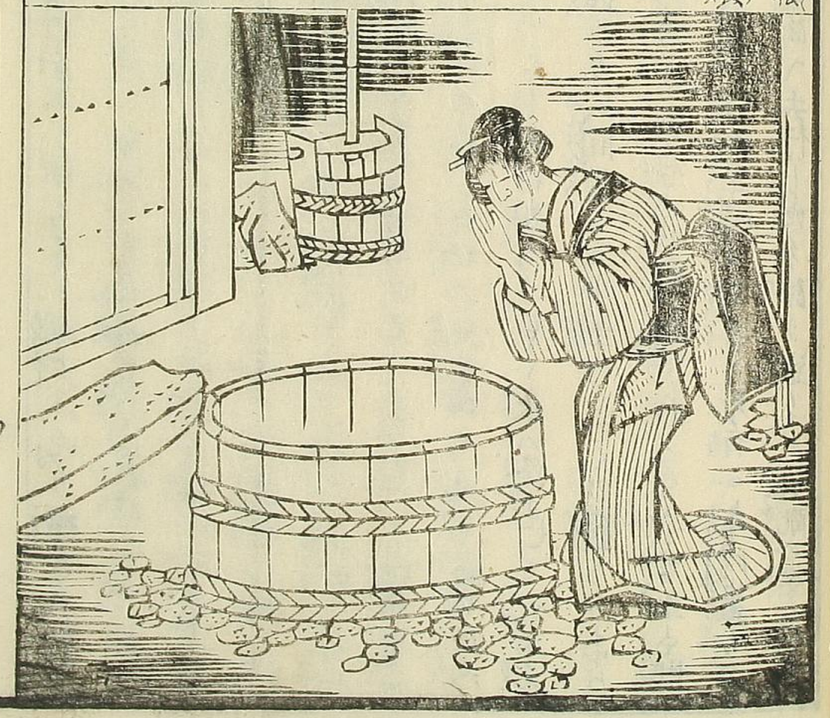
父と呼ぶ子の心の無しとや叩つらん妙くありもくも未遂ぬあふし
と思ひあきらめれが去らるる此分いとつねども捨て面く子を捨てあるも
捨る爹の捨させて捨られし子のあられ泣く声を餘事ふ聞ゆる翠月の賜
ひを甚慶せんと義母が嘆きを十寸続うろひ易き世の中の憂さ比分ふあ
つまりて更よ去られいとふ別るるつらさふ捨へ難て嫁入ふ結合し俺
られて去らるる身の不幸を云く苦情が云ねども未た東西も無きうぬ子ども
捨るがいと惜しさふ紙縒を結て東ねて子どものまた足が伸るまで乳母とて
隷てたべ勿論給金衣類等賜るふ及ばずとまで頻りふ哀しと訴へ〜ろど家
翁いおろ〜私引ら紛べ分らが貴て乙の子を妾ふ附けて賜へと請ひしを家
翁い大く立腹て腹が借りりの雑貨を落れば我でるいハ遠慮へ此方の程の
男のふ何んで斗方へ遣るるのろ諫ことまどとぬきさびとトツ〜ろ出て行け
うるせへと苛酷しくも恩愛の絆を断そ哀れある慈れが妻女の里方ふてい病

癩ふ異るらいとうき世の義理も人情もまら髪を抜らせて若ざるおもきひと
りふあるるひも美金も乱も何せんふまさされる宝の子よかへて二ふきものぞと
いと愛しむ家公の所致ふ呆れへつりて相敵ふるらぎと斗妻法を云ふぶまふく
妻女の身を彼方へ故るく引ようけきべ曩ふ嫁りの像持無して今ふのさり
たる衣服調度その他ちのまふ附けるる物件へめとりふく送りやりて一生るあ
ての金子きさん副させんと料ひたる嫁人が好者を捌して里方ふハ物件のく
受とりてまあて金ハ固く辞て受ぎれが家公ハ盗児ふ迫蔵がたまろうと
りとうち悦びおもきと共ふエイやつと重分腰を動ろーして瓦かがらひを
為ふけりと宇治拾遺ふる翁が福を鬼ふとられし乙地〜つ是までハ有繋の
妻女の前を憚りしふ是よりおもきを人前き権の位ふ去し昇一家の全権
交雑と做しお側去らぬよ強つけるる強つけらるるる育ごに店の仕まひを俟
不繋つ子ども支個ハそうち退け関よ男女がひとろ横双枕の膝つぐるよ雲

雨しとゝ降り和名くゝと泣かせ凝りの塊まりておさきの腹の膨れしが雨も
男子と徐もの左り孕こゝハ開身の好造化あるゝのよろこび一入ふて余らぬさ
おさきの父母い最貧窮ゐ暮せ一を曩ゐあるゝが料らひよて然るべき家よ
住まい一衣食の料不足ゐ〳〵刈こゐ送りければ両親ゐ朱ある誤隙居さま
と成りきまして近愛の人こもあるどらぜ福ゐ御人ぞと義まる〳〵社ゐ一生
押樹が今面どの情性を喜ひゐ一て女妻ゐ彼きんと料るゝ〳〵と数の甲乙
多くも遠ゐ女親を岳父岳母と号こ冊く事とゝ更こゐて婚礼の儀式を立流
ゐ行るゐよど頼すれ煉酌家の奴婢親類出入りの諸商工近所隣の人こも苦〳〵
くい思ふのゐから勢ひ知らぬ彩を一て打も過ど雑げきゞ止む事を得ぞそれ
くゐ祝賀を表一ゐけり既よ一て良辰をあらび婚礼の式おごそかゐとり儀り
る花嫁い今を盛りゐ色ふく〳〵人こが咸うつ〳〵と岩が眉美ゐ相應一ら
らぬ若が〳〵りても老木の花塔三三九度く記くも要ゐき當夜家中ハさゞめきて

喜び酒の賑ひゐ声高砂も涙えの吉ゐ嫁入も宵の役ひぎゐ聞きを帰りあく眠い
小厨と下女ゐ一たまらき疲れゐ食労れあるひい疎て〳〵のまくゐ眠れい前
後も忘らむまで寂寥ゐて音もなく扨〳〵あるゝが鼻息と枕のきこゐおとゐき
へ耳敬こゐるハ〳〵りたり徒てあくる朝いちれやく仮左きの婢ハ起いぞ〳〵
山のとくつくこゐさねくる暁夜酒甚衆殊脱魂魂子鍾愛ゐ擂盃覆ふ洗ひも
のゐ多けきゞ水汲まんとて井戸へ往き何心ゐく井戸の中を覗いてキャッと
驚消る一声まゐぶたかりゐ庖厨へ駆こむ音ゐ一同ゐおどろき覚て起あが
り走りよる人こを婢的い見て胸つぶれたる声をそれから厨出て大愛〳〵
裏の井戸ゐ女の投身があり外と聞てこゐ〳〵ふた〳〵びおどろきツレハと斉一
ゐ〳〵より先づ見認たる井戸端ゐ脱弃一才履ハ焼桐の壁ゐ和肌黒の暴繻
い前の内後のたゝゐ下敷とおびゐあり互ゐ教を目あいて何とせんぞ〳〵縄ゐ
よるつゐとおろして兎も角も引き揚ぎやと立さわぐ声の聞へて何事と衆

義の間を走り出でゝ彼の腕を我と引かへ一寸つめつゝ彼
を捉と指揮をして引あげさせるゆゑ這土地いたべて成井水の迫く湧いでたれを
容易くも引あげて見れば美婦や先妻あり扨おのれひ迫りて女房の狂ふてゝ
形容は身を投げたゆゑ跡を期して怨みの姿をあるじとおも
きは顯はしく見せんとて覚期きはめ一所懸命なるゆゑ止だら
りは捨おきがたき一大事の狀況へ考らせ開筋へ祈へ出て接視をなゆゑ絡雜い
たんたもあく上を下へとくくとりくれば町内は云ふもさらなりそれ
らそれへ早くも注ぐて人々噪くと騒をするゆゑ先妻をありれとおさまを
惜みあるしを祓らめのもあく風評は悪の疑判なるものゝ自ら入
水の屍ゆゑ疑ふ眼もあらざれば一時の発狂と申して事故なく接視もせと
しゆゑ訴滑死ぬるの貧乏よて凡まを盛んは祈も祟らず開後店も繁昌してあるゆ
とおもきゆゑ相もゝらざ腰と漆髪石鹿賀拳を強くも四苦て連理のおゝら墮



ゆる接はそのゆゑ[illegible]の報
ひのあるとあらで[illegible]まゝくも[illegible]
ておきさゆゑ[illegible]て男児を産るが
産後も銀[illegible]肥立られば[illegible]ドの
ようらび大々[illegible]ざ開後又一年
を経て主れて男子を授けたるゆ
名を長次郎と唱ふ倣して[illegible]の
甲乙のゝ先妻の子ゆ孫培したる
殘奏を極めて育つるゆゑ見るく
ゞゆ眼を側てゝうらやむもあり
又死ぬきしてあざけるゆも多ら
りゆるゆゑるゆどゆ先妻のゆゑども

両個いとられも年まだ若き継母のまふうけらるゝ朝夕ふ叱り懲されぬも
まれば尻を抓られ背を打たれてなやゝも云へば食物も当ぶ接拒り合足ら
ねば稼ぎ〻ろふおのづから意地も腕曲くなりもくまゝふ抓ゝ喰やら惹ゝぐ
ひの打ふられていあらられて大く折檻せらるゝごとふ泣く声近麦ゝ聞へけ
ればおもきゞ狂檻の世よ知られて斯てもゆく未悪ゝかりゐんと他祝八目の
人ぐ嗤も七十五日ふて果よい泣てもゆきても又ちゞまッたと餘慶事ふ
赤の他人いあらぬ良ゝと過まく月日ち易く異母の兄第四人兎も角も成人
けり年月日い百代の過客といいろとゝ人の詞ありもく水い絶ぜて而も元
の水よあらぜぬ日のゆと人の語あり人間僅ろ五十年いゝぐくの盛りろわら
ん七十古来稀ある至らで千のあるゝ恋よ情慈ふ遠されども千万年も邯
鄲の枕双ぶる理りあらねば相寝ゝらぬ年順よ色香ぶ有る年場盛りの
可惜女房と置去りはて長の黄泉路へ去行ゝたる跡ふ遺りゝ晩酌の妻とぶど

もの歎きいさらまり老婆ふ惑ひ色ようゝと年来あるゝが私情ふのミ偏より
たれを兄弟ゝ長少の序立ゝて未だ家督も定らざれば如何あらそひの端を
発して仏事の中ふ内証の葛藤絡紛糾起ぶ属より合て結合せるふ如きふ未
だ未若ふれば見より後家を立るい要ふゝ然るべく修飾をして再縁せるゝ宜
ろるべゝと云ふをおもきい諾いぜ年まだ漸ふ春よりて擅那さゆのお嫁を
受さるこの外を争ふい心もあらぬ異夫ふ嫁ぶんとい思ひもぐらぜ西個のも
ぶふいあらるゝぶらも今いおのゝ事も伸て烏滸がましゝも男一匹この母
ぶ再縁ゝてあらぬ義多を頭ふ受ぶが心ゞ迫き由もありゐん妾ふ是より
斬り当家を守護て石ふとて当家より船を出ゝ漕れゐらも妻の跟を追て黄
泉ふ二世の夫婦ゝて仏さゆぶ躰を抓ゝ病中ふもお前さん方もちゞめ庶の庇ふ
も出入流ふも叔田云て遺れさ通り当家の事い及ぜゐゐら妾ぶ随素ゝらら
ひ付り仏さゆでもあらねども世後ひらふ知りもくともある老方の厄介ふ成

りも佞らぎ成して給つる由志しもおろそもど余らが今この場合のお指揮ふ
い及ばと親類中うち寄りたる中へ圖だりと云てのけたる一家の權威をうち
震ふおそきが才力逞ましく是〈千ぶ淀君とくるみ尼を喋むまでお壓倒され
てもあくまと為したる素もあくまのくまらけうたりうれがおそきハ
淀家を張りて内外を締ばり親の子とも家督を定めぞ只先妻の男い常お駄
して店の小厮ら隙よ指き駆使て相續の息子の威力を折くれぞ兄弟おのしう
からで年ぎ者き不了簡より嫁婿を配して遠ま聟り店の金銭を掴み出
し或い他よ借りて返さぞ店より僕ふと志ゝくるる行狀あしくるりたるい論
ておそきが刹るまお隙りたるを僕徒ふ嗤くやッたり。腑を北よろこぶお
そきハ兄弟が行狀のよろしからぬを公然ふ唱へて家督ふ為べき者よあつ
ぞと両個を廃して己ぞ産たる長次郎の兄を以て家主と定めしハ同じ腹よ
り産るふも婦人の性ダ為ぞ性くあるおそきハ乙の長次郎を偏愛しられを

家智ふ湯べきを測るくも先妻の兄弟を横行しる怨ぎを蓄くの嫉れを懷き
且家傭の親族ぶ巴巴とそそ煽りある心よりろようらぬが最愛の長次郎よ
ハ故意とあとを相續せぞふ別家せんと料らふて家産を両段よ分ち静岡
安西二丁目ふ居をトし嫁ありて馬場町ある長月家者ろの乙女を妻を娶りて
夫婦と妻妾おそきハ本家別家を隔表せよ往来しう家産の格りをせしぞ大
概ハ長次郎の許よのゝ立ける嫁のおちよハ性優しく好く母ふつくれ
バ母ふのようとび大かさるらぞ不れバ長次郎深く愛して夫婦中の睦まき
ようおちよの兄稲次郎と長次郎ハ原く交りを実の兄弟のごとくあして表ら長
来ふ慕をるどふおちよハ妊娠て女の子を産み中一年を過て又かさねて男
児を産ふける此方ハ喜慶事のくるるを歳月重るをふハおちよの父宗右衛門が
老衰ふを逐ふ空しくなりたれバおちよハ兄の稲次郎と共ふ無欲の袖しが
る縋ふ恭ろ〳〵長次郎も拭ふ涙の玉〳〵げ兄妹を誘め励まし〳〵仏る儀長ふ

急ぐまで家憲に吊って稼ぎに業の業を嗣ぎ名を宗右エ門と更めて家の脱漏なくらしくらぬ才覚あって善次郎と共に朝夕不足なく富むといふねどあらねども豊裕に世を送りける

第三回

軍話山千の先妻が同胞い若葉るから継母の策に陥りて遠重通ひ店の金子を巻き込こたる義理があれば懲しめの為にと生れし家を追ひ出されても言もなく阿容くと泣くことを得ざりしうべ同胞ゆえ一個くに退縁なるら釈類に依頼て各方を尋ねが釈類中も継母の不義を怒らざるにあらねども嫡成るから母おもきに先代の種なるらぬにあらずを放蕩のゆえも長男なれば跡へ居よと強ても云へども只両同胞が動静を見るに先妻の同胞は人の厄介と為りながら不身もちをたちたるおそ夜ごとに日止りに遊びあるさ遠ざ去ければ丹家ある手ぢるる衣類器物を持ち出し或い典物とし或は又で

つたりに沛却已或い近寄に借金をとしらく開尻を持ちて乱暴不埒な乗りて世話を為てちく牧勢も呆れて遠ふ兄弟に旨那方此方を放逐されて富家けまどと世の兄なれい悪友のつりありて雨も清き宿も角も恐ぶ

なるら殿も空さび撫腹ハ下げて由為若して終夜を明せ素もるれば平氣

中て他ふも酔を夜へ必ず双街巷を一四去見されい眠ふ就られぞと宵々ごとに悪友們と連れ立て行く地廻り様一夜兄弟只両個親月夜に微酔朦朧街巷より仮りに栖む草庵へ帰り来る路の辺に一個の男児赤裸にて髪ふり乱し頻りに天を仰ぎて合掌黙禱他念なき形状のいぶかしく更て往来も絶られば落気味なるく兄弟が面見合して恐るく遠くを過りて足むやは行んとせを彼の男ハ仏と見て近く寄り四つ眼を光ら睚眦として肘を張り汝們元夫不埒なり我今月宮に系拾して腕に勅宣を蒙る妻ハ妨げに来る悪魔外道怨敵退散点去れ立去れ畜生畜物法皇陀仏女慕哭ア高天ら原ふハ神止まる

仇凶平等ヤレ損た孫廣く力量らい動く別勝甲と吉を凶を是狂女と兄弟いたに
ぬて知て思ふもの噴飯を発ふ疳癪者いまどろきたりけん者を嗤て侍怒く
と直すりふ何処ともなく去りふたり跡を見きる兄弟ハ恩賜くしい
狂まふ遭遇て肝を冷したと謚さ侍又三三町来る程ふ草深迄くあるる猪い鉄
りふ年前第二時の八時とハ云へと凶やとも思ぬ兄弟ハ夫れ除杉と歩む向
ふの路傍ふ何やら遺たるものあり庶づき見れば四角ふ為る紙裏の重れ
てあるを茅が早く上の一封を採り上げ見れば此ハ基麼当時俗ふ額といひ切
餅とのふ二分銀八包こ合して二百両是ハ那ドヤと兄弟が面見合して侍て去
迚偽造りめら但しまた狐が魅して遊ぶのうと打反し見る封印ハ確認る
りのと推祈が せび頭つれ出る小梅の花さく春ふ曾兄弟半分ひけふ資本と
て江戸へ往て何うふありつき世間の面を見返さうと兄が意見をまも諾るひ
人ものやまると前後を見うり四包こ侍兄弟が分て開場を立去りしより双

びも行うせ彼が左右ふ跟へ引ききがを見も亦茅ふ故意と後んとして通ゆせ
ぬ尿るどて兄弟が互ひふ隙を窺ふ動静ふ後ふあり前ふあり又二三町来る
往ま何思ひけん弟が手拭ふ裏くたる彼の四包百円の金を路傍へ抛り出し兄
弟が雑ふ隙ひい弟ふ附ぬと云へふ兄いうち殘き開い又何故と問へハ茅
ハ嘆息しつ流まぬ素だが拾た金倘一個あら二百両弟ふ附く実を兄貴と山
分ハ寧のとふ由断を見きは兄貴を猛り教しても二百両を全収ふ為やうと
思ひて思心を考へて見れい浅まし我が片腕を金もふ断りおしまてよろまざ
しと五逆の罪を犯さとりふも金が仇敵とハ此事と心復てハそら恐しい小人
罪ふ至を懐いて罪ありとりふ便語のふ一気所ふ際と捨ました怒しと下
さい兄貴どのと聞て兄も嘆息し実ハ已も然思ひた弟が在さい二百両を咸已
が有と為るふ斯りして時ふハ兄弟のあるも邪魔為る弟を猛殺さうと今まて
道く幾度何たび背うら掛るふと為たるまてあ尺ゆ開気が有て那も際のあり

たゝ[illegible]の遅が蟲ぬのたゝみら已も捨るのなら越ぬ[illegible]が捨た金を消こ[illegible]ふ
西個須ると云ゞとも[illegible]さぬ大罪人この所有ぬ[illegible]ハ盗[illegible]れならん積重ね
てあ[illegible]を見れば遺[illegible]たりとも思はれぬ何う所謂のある事ならんふ原の地
へ持て行て今宵両個ゞ金の監守人夜明ても未だ主ゞ出ぎハ地の庄屋ふ由を
告て訴へ出るゞ保理だと兄ゞハ本妻ふ立還りもく原の路彼の封金をあひ[illegible]
ふ積重ねたる俵ふ夜を守る両個の改心義士誰ゞまぬらんとぞかりふ互ひふと
[illegible]る春の夜を空負ふも俵て稍長きのこゝ風さそふ餘寒ふ雷を犯さるく[illegible]衣
[illegible]と思ふ搖しも二殊さたりのら張弔物ふ[illegible]て[illegible]ふ来る一隊の人声迫く聞
へけれゞ原来監視の跟追てたづねゞ来ふける人もやと俵つ間ゞとなくさくみ
寄る四五人の人くゞ闇暗よりも両個を見てなるき疑ひ曖昧形状ふ見ゞまゝ
く声ゞ[illegible]て人く怒きうたゞひゞふ[illegible]れく此ふ由あて当ゞき人を俵つゞめ
[illegible]ふ[illegible]ゞ彼も亦この夜更ふ俵らの所要ありてぞと向へゞ彼方の人くハ氣

味[illegible]ふ[illegible]ふ分れをとよ吾ゞも村のお旦那[illegible]
弁と呼て兄ゞ[illegible]ち黙[illegible]ふ[illegible]ハ如何ある品物と問へくされ
てイヤ何ゞ品物でハムらぬゞ倘疎癲体の青年男をお見ゞけハゞさらると呼ゞ
れてそんなら人ゞ[illegible]ゞ二三町先よ裸でムッたゞ开狂夫でゞりませう吾ゞも警
いたゞ俵たゞ吾ゞを見て一目さんふ向ふの方へそって行ったと呼てたゞぬ
る当ゞ村ふる一隊ハひさく立ちそれだゞ此方角でハ安倍川ゞ見来ぬ些とも
[illegible]く追跡ようと行きかゞるを兄ゞ[illegible]ゞ俵ねと呼ゞめてその狂夫ど
のゞ何品ゞ持出ゞハ渕ゞさらぬと呼ゞられて大家ゞたちゞどり开狂夫どのハ
安東村の安兼さんの若旦那このゞろ偶と氣ゞ狂たれゞ王義へ入て置られく
を那ゞた隙やら今青服け半ゞ何ゞ行とゞ一向知れゞ跟を見れを金盗笥ゞ
ら封金二百両を持出ゞたと云ふ大騒動四方八方たゞゞふ出る村中ゞ総掛りて
て开金のゞがゞろ何ゞでありゞも渕弁めゞと呼て黙頭く兄ゞハ分れがてムゞ

る吾輩が夜風ふ吹くれて斯して在たも丹金の監守をして外の出るのを俟て
のまーたゝ大ゝこ是でありませうと地上ふ積だるを指示せが吊灯をも附て見れ
ば切餅八重ねふ是ハと大家おどろくをふもとそれと足手が通りぐりふ見つけ
た此金一包封じの切れるハ倘や童兒の漫戯と開いて見たる月明りまぐふ
ゑなき正真のあとハ見るふも及むぞとありのまーふして置はたゝら積重ねた
ハ盗むのとも遺失とも思われぞ熟ゝ立が出てきうと異ぐ物を見つけさ老父
寒い思ひをしまとうが皆さんふ遇て投ぐ渡を安来さんハ吾輩の亡父が由緒と
であり且さが五輩ハ遂そのくち大庄不沙汰を致ーまとて入手の足手ことを守ーく
云ておりるべーそんあら此金ハ皆さんへ進よお遠慮ーゆしまーこと袖を掃つて渡
白く立さらんとする傍の徑の蔭ま人あり立て暫時後れと唱とるハ阿誰と足手
ふりかハり平方の暇を遠して見ふたり

竹田善次新形賊機小紋初編巻之中了

010190517395

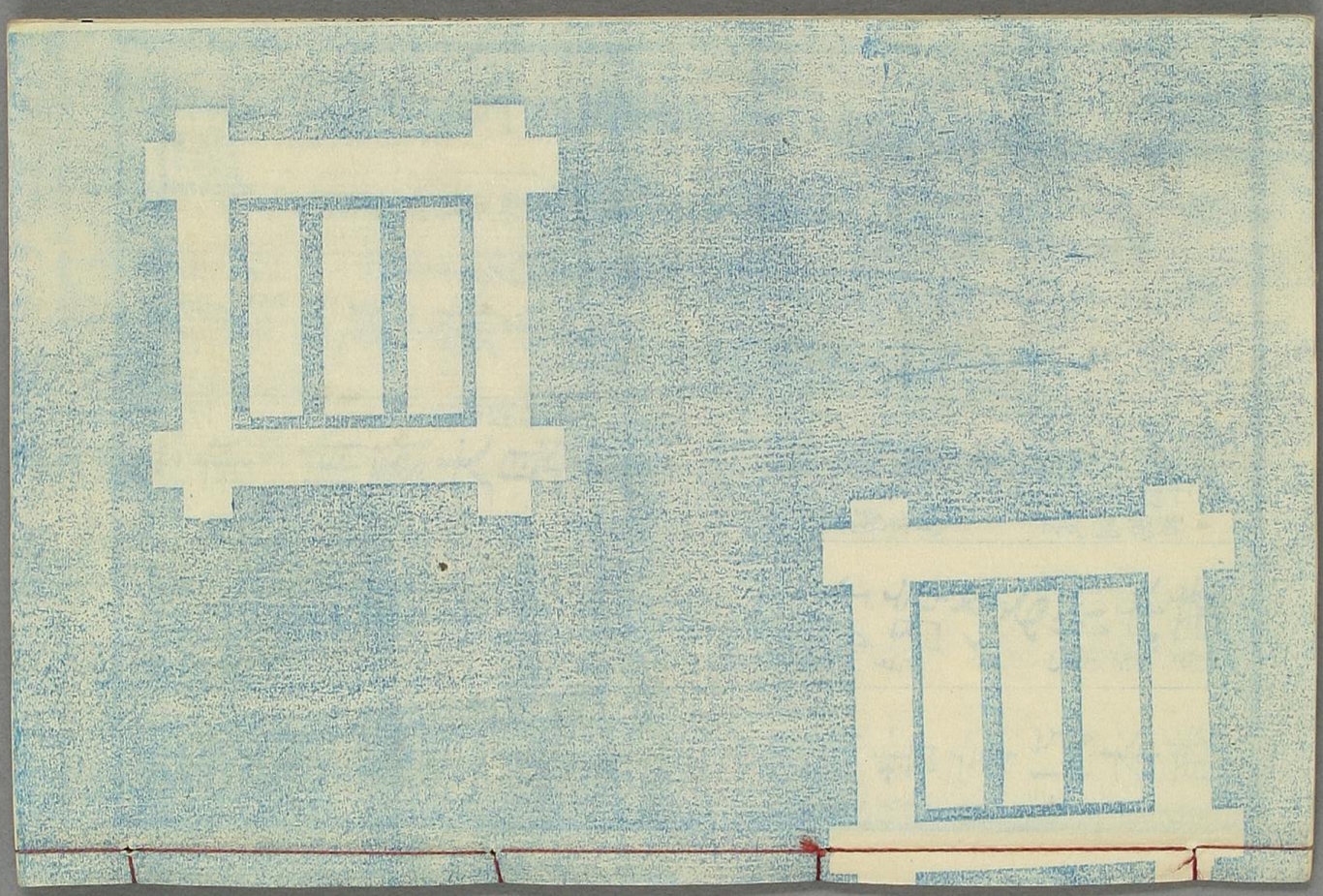
小學教課書算法用文證書字引本類

新合巻續物切附物一代記ゆる附本類

三府樂屋俳優大見立 大阪板 梅廼家亀五郎 武田善次 逸岳画 給金附 改名録附

博物圖教授法 松川半山註解并画 大阪岡島板 前編十二冊 后編十五冊

新形靜機小紋 諸國妙藥取次所 御屆明治十三年七月 日 著述人 静岡紺屋町六十三番地 萩原乙彦 静岡上魚町字上ノ店五十番地居住 今津美之助

開化ぞ一そうた大流ゑ 彩色入小本 辻うら類

三 書籍地本 問屋文正堂 出版人